

「環境未来都市・下川」への疑問 ⑧

ルポライター・滝川康治(下川町在住)

草木系バイオマス試験の実像

Bコークスの教訓

イタドリなどを原料にした「バイオコ

ークス」と呼ぶ固形

燃料を使ってトマト

を栽培する試みが、

09年度から班溪地区

の農業用ハウスで行

われた(12年度で終

了)。下川町や近畿

大学などによる実証

試験で、経産省の事

業。町は「環境モデ

ル都市事業」の一環

と位置つけた。

「町は窓口になっ

ただけで、何もやっ

てくれなかった。も

っと熱心だったら、

違う方向性が出てき

たのに」と悔しが

るのは、栽培試験を

受託した川井義広さ

ん(37)だ。

北はるか農協を介

し、トマト栽培をし

ていた川井さんに声

がかかり、家族4人

が作業に従事。専用

ポイラーでバイオコ

ークスを燃やし、2

3月の早期定植が

可能かを調べた。

コークス原料は下

川産イタドリ(全体

の1割)やミカンの

皮、茶殻など。固形

燃料に加工後、下川

へ運んで燃やす。近

大や機械メーカーと

連絡を取り合い、町

の担当者も頻繁に訪

問。新聞やテレビに

何度も紹介された。

だが、2年目に町

の担当者が変わると

足が遠のく。栽培技

術を工夫し、トマト

の糖度も上がり、経

営にプラス効果が現

れた時期だった。

「試験には町の協

力が欠かせない。こ

の技術を下川に定着

させるには、農協な

どにもっと働きかけ

るべきだった」と川

井さんが指摘する。

結局、燃料代やコ

ークスの輸送費、電

気代がかかり、灯油

を使う方が安かつ

た。地元で確保した

原料でバイオ燃料を

製造しないと経済的

に無理と分かる。

道経産局は「技術

面の課題はクリアし

たが、コスト面が問

題。将来、道内で国

費を使ったバイオコ

ークス事業はありま

せん(環境・リサイ

クル課)と話す。

「下川を実験場に

するのはいい。で

も、町にやる気がな

いと(国や大学、企

業)に利用されて終

わりになる」と、川

井さんは残念がる。

これが「環境モデル

都市事業」の実態

だ。

ススキにも着手

「木質バイオに熱

心だけど、ヤナギの

栽培だけはどうかと

思ったね」と、下川

の熱源としても十

り5〜13トン(乾燥

重量)の収量がある

との結果を得た。22

年間に7回収穫する

と、トンあたりのコ

ストは1・1万円。

これなら木質ポイラ

ーの熱源としても十

分(町バイオマス産

業推進室)。だが、

試験が終わった後は

どうするのか。

「道内でヤナギの

バイオマス利用を実

用化する話は聞か

ない(上川総合振興局

林務課)。成長は早

いものの細かいヤナギ

に、大きな期待はで

きないだろう。

能力を調べたい」と

話す。町は「可能性

を追求する段階であ

り、これから年次計

画などを語る(農

務課)という。

油用作物として大

豆の栽培計画もある

が、現在の販売用大

豆作付面積はゼロ。

関係団体との協議も

なく、机上論で終わ

る可能性が高い。

「北海道の草木系

バイオの乾物重量

は、北見農業試験場

が試作した産業用大

麻のヘクターあた

り53トンが最高。ス

スキやヤナギの比で

はない」と話すの

は、前上川農試場長

の菊地治己さん

(63)だ。

産業用大麻は品種

改良によって薬理成

分をほとんど含まな

い無毒大麻のこと。

緑肥やバイオマス、

建材、衣料、食品な

ど多目的に使える。

道は8月、「可能性検

討会」を設け活用策

を検討中。東川町な

どが関心を示す。「バ

イオ利用を考えるな

ら、下川も産業用大

麻に目を向けてはど

うか」と、菊地さん

が提言する。

格好の実験場にされて...

農業とつながる賢明な方法が課題

「町は窓口になっただけで、何もやってくれなかった。もっと熱心だったら、違う方向性が出てきたのに」と悔しがるのは、栽培試験を受託した川井義広さん(37)だ。

北はるか農協を介し、トマト栽培をしていた川井さんに声がかかり、家族4人が作業に従事。専用ポイラーでバイオコークスを燃やし、23月の早期定植が可能かを調べた。コークス原料は下川産イタドリ(全体の1割)やミカンの皮、茶殻など。固形燃料に加工後、下川へ運んで燃やす。近大や機械メーカーと連絡を取り合い、町の担当者も頻繁に訪問。新聞やテレビに何度も紹介された。だが、2年目に町の担当者が変わると足が遠のく。栽培技術を工夫し、トマトの糖度も上がり、経営にプラス効果が現れた時期だった。

「試験には町の協力が欠かせない。この技術を下川に定着させるには、農協などにもっと働きかけるべきだった」と川井さんが指摘する。結局、燃料代やコークスの輸送費、電気代がかかり、灯油を使う方が安かった。地元で確保した原料でバイオ燃料を製造しないと経済的に無理と分かる。

道経産局は「技術面の課題はクリアしたが、コスト面が問題。将来、道内で国費を使ったバイオコークス事業はありません(環境・リサイクル課)と話す。

「下川を実験場にするのはいい。でも、町にやる気がないと(国や大学、企業)に利用されて終わるになる」と、川井さんは残念がる。これが「環境モデル都市事業」の実態だ。

ススキにも着手「木質バイオに熱心だけど、ヤナギの栽培だけはどうかと考えたね」と、下川の熱源としても十

分(町バイオマス産業推進室)。だが、試験が終わった後はどうするのか。

「道内でヤナギのバイオマス利用を実用化する話は聞かない(上川総合振興局林務課)。成長は早いものの細かいヤナギに、大きな期待はできないだろう。

能力を調べたい」と話す。町は「可能性を追求する段階であり、これから年次計画などを語る(農務課)という。

油用作物として大豆の栽培計画もあるが、現在の販売用大豆作付面積はゼロ。関係団体との協議もなく、机上論で終わる可能性が高い。

「北海道の草木系バイオの乾物重量は、北見農業試験場が試作した産業用大麻のヘクターあたり53トンが最高。ススキやヤナギの比ではない」と話すのは、前上川農試場長の菊地治己さん(63)だ。

産業用大麻は品種改良によって薬理成分をほとんど含まない無毒大麻のこと。緑肥やバイオマス、建材、衣料、食品など多目的に使える。道は8月、「可能性検討会」を設け活用策を検討中。東川町などに関心を示す。「バイオ利用を考えるなら、下川も産業用大麻に目を向けてはどうか」と、菊地さんが提言する。



バイオコークス(右上)を使いトマトの栽培試験を実施したハウス(近く撤廃予定)